



Title	T+3 1C Pol y morphism of Angiotensinogen Gene and Essential Hypertension
Author(s)	石川, 一彦
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44556
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 いし かわ かず ひこ
石 川 一 彦

博士の専攻分野の名称 博 士 (医 学)

学 位 記 番 号 第 1 7 9 6 7 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 15 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学 位 論 文 名 *T+31C* Polymorphism of Angiotensinogen Gene and Essential Hypertension
(アンジオテンシノーゲン遺伝子 T+31C 多型と本態性高血圧症)

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 荻原 俊男

(副査)

教 授 戸田 達史 教 授 網野 信行

論 文 内 容 の 要 旨

[目的]

高血圧症は生活習慣の他に、いくつかの遺伝的要素が影響すると言われている。レニン、アンジオテンシン系は血圧調節の重要な機構であり、高血圧症の候補遺伝子として多くの研究が行われてきた。その中で 1992 年に初めてアンジオテンシノーゲン遺伝子 (AGT) の M235T 多型が本態性高血圧症及び血中 AGT 濃度と相関していることが発表された。またその後プロモーター領域に存在する G-6A 多型が M235T 多型と完全連鎖不平衡にあり、この多型による発現の違いが高血圧につながるという報告もされた。しかし依然として AGT 遺伝子と本態性高血圧症との関係は多くの研究がなされたのにも関わらず、結論に至らず、対照の選び方や数における問題点が提起されている。今回我々はその問題を解消するために大規模一般集団を用いて TaqMan 法により AGT と高血圧症の関係を調べた。

[方法ならびに成績]

この研究はインフォームドコンセントを得られた大阪府吹田市の一般住民 (4013 人) を対照に行われた。高血圧を血圧 140/90 mmHg 以上もしくは降圧剤服用者と定義し、両親もしくは同胞に高血圧者を有する者を高血圧家族歴ありとした。遺伝子多型は M235T 多型、G-6A 多型と完全連鎖不平衡にある T+31C 多型を TaqMan 法によりタイピングし、統計解析は StatView4.5J と JMP3.1.5 の 2 つのコンピューターソフトを使用した。TaqMan 法は遺伝子多型に特異的な蛍光プローブを用いて PCR を行い、蛍光量をコンピューターで判定する方法であり、大量のサンプルを短時間で処理することが可能である。

結果として、高血圧者は正常血圧者に比べ、血圧の他に年齢、性別、BMI、高血圧家族歴、喫煙、血中コレステロール値、血中中性脂肪値、血中 HDL コレステロール値、血中クレアチニン値、空腹時血糖値において有意差を認めた。AGT T+31C 多型の頻度は高血圧群、正常血圧群間で有意差を認めず、年齢、性別、BMI、高血圧家族歴、喫煙、血中コレステロール値、血中中性脂肪値、血中 HDL コレステロール値、血中クレアチニン値、空腹時血糖値を補正した上でも結果は変わらなかった。ところが C アリルを有する者は有意に高血圧家族歴を有する割合が高く ($p < 0.05$, 相対危険度 1.2)、この結果は年齢、性別、BMI 及び高血圧の有無で補正した上でも有意な差が認められた。次に家族歴の内容について検討したところ、父親もしくは同胞に高血圧を有する者で遺伝子多型の頻度において有意差を認め、母親に高血圧を有する者に関しては差がなかった。

[総括]

今まで様々な報告で結論が一致しなかった AGT 遺伝子と本態性高血圧症との関係を 4013 人という大規模一般集団において調査した。これは対照人数が少ない事による統計的な誤りを減らすという点において有用である。また多数の検体を調べるために、時間、コスト面で優れていると考えられる TaqMan 法を用いた。結果は高血圧の有無とは関連せず、高血圧家族歴を持つ者、特に父親もしくは同胞に高血圧者がいる者に C アリルの頻度が高かった。高血圧症は一般に年齢を経るに従って発症頻度が増すために、ある時点で正常血圧群であっても将来高血圧群に移行する可能性がある。そういう意味では、家族歴と相関する事から、AGT 遺伝子が男性における高血圧症に、関与している事が考えられた。また今回 T+31C 多型を M235T 多型や G-6A 多型のマーカーとして用いたが、この多型によっていくつかの転写因子 (Evi-1、Elf-1、Poly、HSF) の結合度が変化する事からこの多型自体が直接機能変化を来すのかもしれない。

論文審査の結果の要旨

本態性高血圧症の原因遺伝子としてレニン、アンジオテンシン系の主要構成因子であるアンジオテンシノーゲン遺伝子 (AGT) が注目されてきた。M235T 多型が血中アンジオテンシノーゲン濃度と相関することから高血圧との関連が報告され、その後プロモーター領域にあり M235T 多型と連鎖不平衡にある G-6A 多型が機能変化の原因とされた。しかしその後の追試では必ずしも結論が一定していない。本研究では約 4000 人の大規模一般集団を用いて遺伝子変異と高血圧の関係を検討した。

大規模サンプルを処理するため遺伝子多型に特異的な蛍光プローブを用いた TaqMan-PCR 法を用い、M235T 及び G-6A と連鎖不平衡にある T+31C 多型をタイピングした。結果、AGT T+31C 多型の頻度は高血圧群、正常血圧群間で有意差を認めなかったが、C アリルを有する者は有意に高血圧家族歴を有する割合が高く ($p < 0.05$ 、相対危険度 1.2)、年齢、性別、BMI 及び高血圧の有無で補正した上でも有意な差が認められた。また家族歴と多型との関係は父親もしくは同胞に高血圧を有する者において有意であった。本研究はランダム抽出された多数例の住民検診者を対象としたためこれまでのケースコントロール研究において指摘された人数及び対照の選定での問題点を減ずる事ができた。また多数検体を正確に短時間で安価に処理可能な TaqMan-PCR 法による AGT 遺伝子の解析に成功した。AGT 遺伝子が発症年齢が高い高血圧という疾患において、家族歴が重要である事、AGT 遺伝子が男性における高血圧発症に関与している可能性などを示した。本研究は本態性高血圧の遺伝子解析において重要な結果を見い出しており、学位の授与に値すると思われる。